

「誰一人取り残されない学び」のために、今こそ必要な“アウトリーチ”

日本財団が開催する「不登校伴走支援フォーラム 2026」の開催趣旨を読み、大きな期待を抱いた。

「不登校を子どもや家庭、学校だけの問題ではなく、社会全体の課題として捉える」という考え方は、これからの不登校支援に欠かせない視点である。そして、多様な学びの場や居場所を保障し、子どもの声を起点とした伴走支援を目指す方向性にも深く共感する。

一方で、このフォーラムがさらに大きな意義を持つためには、もう一つ大切なテーマがある。

それは、「支援につながることでさえできていない子どもと家族」をどう支えるのか、という視点である。

現在、不登校の子どもは年々増加しているが、その中には学校にも行けず、フリースクールにも行けず、相談機関にもつながらず、自宅で孤立している子どもたちが数多く存在する。そして、その保護者もまた、誰にも相談できず、悩みを抱え込んでいる。

こうした子どもや家族は、自ら支援を求めることが難しい。

だからこそ、「待つ支援」だけでは届かない。

支援が必要な人ほど、自分から助けを求められないという現実がある。

当法人はこれまで、不登校支援において最も重要なのは、「来てください」という支援ではなく、「伺います」というアウトリーチの発想だと考えてきた。

支援の入り口は、子どもではなく保護者である場合も少なくない。

まず家族の不安に寄り添い、信頼関係を築き、家庭全体を支えながら、少しずつ子どもとの関係をつくっていく。

この伴走こそが、早期回復への第一歩になる。

その役割を担う専門職として、私は訪問看護師に大きな可能性を感じている。

訪問看護師は、家庭という生活の場に入り込み、子どもだけでなく保護者やきょうだいを含めた家族全体を見ながら支援することができる専門職である。

精神保健や発達、家族支援の知識を持ち、医療・福祉・教育をつなぐ役割も果たせる。

そして何より、「家まで来てくれる」という安心感は、孤立している家庭にとって大きな支えとなる。

私たちが実施してきた訪問による伴走支援でも、子どもだけでなく保護者の表情が少しずつ変わり、家庭全体に変化が生まれる事例を数多く経験してきた。

学校へ戻ることだけがゴールではない。

しかし、社会とのつながりを回復するためには、最初の一步を支える人が必要である。

その一步を家庭まで届ける支援こそ、これからの不登校支援に欠かせない。

日本財団が掲げる「誰一人取り残されない学びの保障」という理念を実現するためには、多様な学びの場を充実させることと同時に、その場へ向かうことすら難しい家庭へのアウトリーチを社会の仕組みとして整えていく必要がある。

「支援を待つ社会」から「支援が家庭へ届く社会」へ。

その転換が実現したとき、本当の意味で「誰一人取り残されない」社会に近づくのではないだろうか。

日本財団のフォーラムが、多様な学びの保障とともに、支援につながっていない子どもや家族への伴走支援の重要性についても議論を深める場となることを期待したい。

不登校支援の未来は、「来られる子どもを支えること」と「来られない子どもへ支援を届けること」の両輪があってこそ築かれる。

その両輪が回り始めたとき、一人でも多くの子どもと家族が孤立から抜け出し、自分らしい未来への一步を踏み出せる社会に近づいていくはずである。

<試案として提案する>

